

2016年度 秋学期

**ハイブリッド・プロジェクトA
最終レポート**

ハイブリッド・プロジェクトに参加して

学生 A

「国際関係学部の魅力とは？」

ハイブリッド・プロジェクトを受講し、私はその答えを再発見した。

入学前から国際関係学部のパンフレットの教授紹介欄を熟読し、国際関係学という学問の広範さに圧倒されていたのだが、実際にこの講義を受講し、身をもって実感した。私たち学生の何気ない一言や素朴な疑問に、専門分野も地域も異なる先生方が自身の知識や経験を活かし、様々な方向から意見を交わすこの講義。毎回「宗教」、「音楽」、「国旗」…、と議論するテーマが違うが、その度に経済や文化、法律に音声学などそれぞれ全く違った角度から意見が出て、私自身も視野を広げて考えることの重要性、面白さを学ぶことができた。

中でも特に白熱した議論に「国歌」というテーマがあった。普段気にも留めなかった国歌だが、そのルーツや歌詞の意味、リズムから見る曲の特徴などを知ると、宗教やその国の社会背景が複雑に絡んでいることが分かった。また、「じゃあ次は世界統一国歌を作るのはどうか？」などユニークな案も生まれ、とても盛り上がった。このように、自分の身近な所にもたくさんテーマが転がっていて、そこに目を向ければもっと自分の視野を広げられるということを実感した。そして、この国際関係学部という場所は、様々な知識の宝庫なのだと思う。政治や経済、文化、政治、宗教など先生方の専門分野は多岐にわたっており、また、専門地域はアジアだけでなく、ヨーロッパやアフリカ、オセアニアなど世界を網羅している。つまり、私たち学生が視野を広げられる環境が十分にあるのだ。私自身、大学に入学する前は国際協力や国際経済に関心があり、大学4年間を通して詳しく勉強していきたいと考えていた。しかし、実際に国際関係学部に入學し、またハイブリッド・プロジェクトに参加していく中で、自分の知らない国の文化や日本との意外なつながりを知り、政治や経済だけでなく、もっと他国の文化や歴史についても勉強したいと思うようになった。

「国際関係学部とは何を学ぶ学部なのか？」よく友人などから尋ねられる。その度に返答に困り、「とにかく何でも学べる学部だよ」と答えている。内容の薄い答えだとは自分でも感じてはいるのだが、国際関係学部を一言で表すに一番ふさわしいのではないだろうか。「何でも」学べるのがこの学部の最大の長所であり、ハイブリッド・プロジェクトを通して改めてその魅力を実感した。今後はハイブリッド・プロジェクトで得られた幅広い知識を活かし、自分が少しでも興味をもったことに「何でも」挑戦していこうと改めて思った。

学生B

プロジェクトを始めることでこれからも学ぶべきこと

○初めに

ハイブリッドプロジェクトが始動するための前準備ということでオープンキャンパスでは体験模擬授業が行われていた。異なった分野の先生方が二人体制で1時間授業を行った際、ほとんどの先生は1時間以内に授業を終わらせてはいなかった。そのとき本格的に始動したら1時間半以内に終わるのか不安になった。

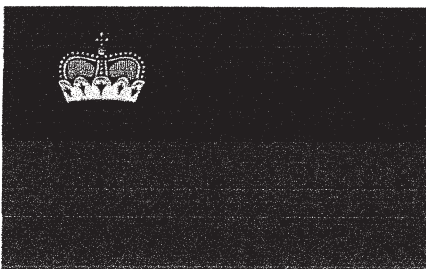
○受講して

私は歴史に興味があり、歴史を知りながら未来を歩む能力を仕事にしたいがために学芸員を目指している。プロジェクト内でも話す内容は歴史ばかりになった。しかしそれはさまざまな視点から国際を学び国境の境界線を越えていく学部の理念とは大きく違うことにプロジェクト内で改めて気づいた。自由をテーマに生徒がそれぞれ調べ発表するときに、みんな国際に絡み合わせながらわかりやすく説明をしていた。先生方にも違う分野において発言がしやすいテーマを用いることで1時間半がかなり短いと感ずることができた。

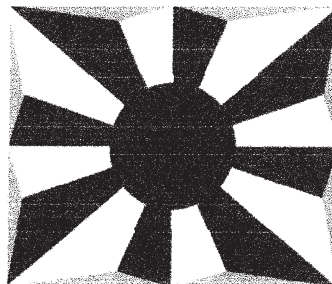
特に面白かったのは、「国際スポーツ」において国技などから考えるというテーマである。私は、スポーツは苦手であり得意ではない分野だった。しかし、イギリスに留学した時に聞かれたことは「何のスポーツが好き？」だった。他国ではスポーツが盛んで必ず得意スポーツが各自存在していた。スポーツ番組でも家族が見ていたのをぼんやりと眺めていただけである。プロジェクトを機にスポーツ番組を見たら確かに違和感を感ずることができた。

国旗に関する授業においても、日本がなぜシンプルなデザインを使うのか、いつ使われたのかのように普段気にしないことを議題にすることで、確かにと感ずる点が多々あった。祝日には国旗を飾る形式を最近では行われていないことなど自分が住む地域以外の話も大変興味深い事実だった。日章旗以外にも他国の国旗や軍旗なども興味がわき少し調べることもできた。

例) ↓ (リヒテンシュタイン 国旗)



↓ (日本 自衛隊旗)



○最後に

ハイブリッドプロジェクトAは先生も初ということで手探り状態だったが、議論で止まっても先生が専門の視点で意見をフォローしてくださり、生徒側からも絶対発言が行えるように努めていた。生徒が司会を担当することで社会に役立つスキルを上げる勉強もできた。しかし、時間が秋学期分の90分のみだと物足りない。生徒の発表も最後の授業時には一気に複数人の発表を聞き意見交換を行ったので、時間配分も短かった。今後はその日に何人が発表するのか事前に考えると時間配分を均等になるかもしれない。今学期では少人数だったため話し合いの意見もスムーズにできた。私は今回の体制のほうが自分の意見を出しやすく、聞いてもらえると思う。大人数のハイブリッドプロジェクトでは今回のようにはいかない。

今回のハイブリッドプロジェクトにおいて私の反省点として発表の準備が不十分だったことである。私以外の方はレジメの資料を用意していた。パワーポイントだけでは聞く人の手元に資料は来ない。レジメの資料も用意すれば、専門用語の説明も省くなど工夫ができた。今後もハイブリッドプロジェクト以外にプレゼンを行う機会は増えてくる。今回の失敗を次にどう活かすかがよく分かった。

ハイブリッドプロジェクトを受講して、様々な分野を考える機会を得たが私の学芸員の夢が変わることはない。日本近現代史専門のハーバード大学のアンドルー・ゴードン教授はこう述べている。

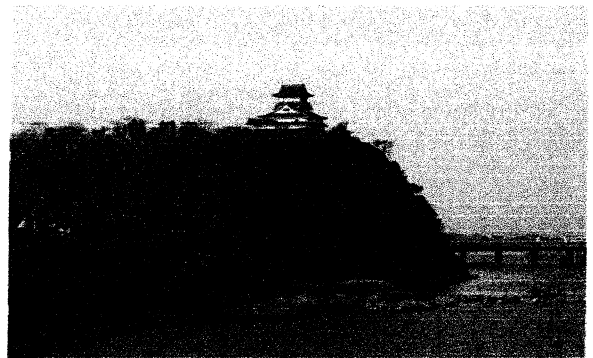
将来は常に不確定です。例えば、江戸時代の末期に外国人が日本に来たとき、「あなたの国では50年後、イギリスやドイツをモデルにした憲法を制定すると思いますか」と聞いたら、日本人は誰もが「そんなことはあり得ない」と答えたでしょう。変化を予測することは難しい。歴史から学べることは、「将来は予言できない」ということです。

(<http://www.mugendai-web.jp/archives/2405> Mugendai (無限大))

歴史を学ぶことで意味はあるのかと聞かれることも多いが、歴史を学ぶことは無駄なことではないということを、みんなにも知っていただきたい。オバマ元大統領が広島を訪問し安倍総理が真珠湾を訪問した理由にも歴史も国際情勢に大きく関わっている。歴史も国際には欠かせない分野だ。次回のハイブリッドプロジェクトでもそれぞれが興味を持つ分野を綺麗でなくとも混ざり合った授業を行っていきけるようにしたい。

犬山城 →

※犬山城のこの角度で写真を撮られることが多いが撮影場所は岐阜県と愛知県の境界線上なので県民争いがよく起こる。



感想

私は、このハイブリッド・プロジェクトを受講してよかったと思っている。自分が以前と比べて格段に成長できたからである。はじめは沢山の先生方と話せる機会はなかなかないから、と興味本位で受講しようと思った程度だった。しかし、いざ受講してみると、先生方それぞれの貴重なお話を伺うことができるだけでなく、同じ国際学科1年の皆さんの学ぼうとする姿勢、レベルの高さに刺激を受けることもできた。同じ学生なのに、自分と全く異なった意見や感じ方で内容を受け取っていることがあり、とても面白いと感じた。

また、積極的に意見や質問を出すことが癖となり、他の講義でも積極的に発言できるようになったり、人前で話すことがあっても緊張することなく話せるようになったりと、以前の人前で緊張してうまく話せなかった自分、誰かが発言するだろうとどこか人任せにしていた消極的な自分を変えることができた。これはハイブリッド・プロジェクトのおかげである。これ、と限定された学問を学ぶのではなく、様々な違うジャンルを融合して学ぶ、という貴重な体験ができた。また、学習面だけでなく、社会に出て行くための準備も同時にできたのでよかったと感じている。

印象に残っている内容

私が今までで一番印象に残っている内容は、和崎先生（おそらく）がくださったドイツの新聞記事の話題である。多くの移民や難民が来たことで、何か事件が起こると彼らが事件を起こした、と考える人が増えた。そこで偏見をなくすために容疑者の国籍を公表する、というものだった。“偏見をなくすために”、“少数者を守るために”と活動するのは良いことだと思う。しかし、別の視点で考えてみる。国籍を公表するという事は、“難民・移民”ということがはっきり分かってしまうということだ。これは差別にはならないのか、と私は疑問に感じた。事件が起こった際、犯人が“ドイツ国民”であれば移民・難民ばかりが犯罪を起こすわけではない、と彼らを保護することができるだろう。しかし、犯人が移民・難民だった場合、彼らの保護どころか現在の偏見をさらに悪化させてしまうのではないかと思った。

このように、一点の視点だけで見るのではなく、他の違った視点から物事をとらえる、他の国と比較してみる、という力はハイブリッド・プロジェクトに参加していなかったら身につけていなかったと思う。これからもニュースや本などを積極的に見て、様々な視点で物事を捉えられるように力をつけていきたいと思った。

ハイブリッドプロジェクトを受講してみた

学生D

今回、ハイブリッドプロジェクトを受けてみてとても良い経験をさせてもらいました。大学の授業という、ただ先生に教えていただいたことをそのままノートに書き留めてテストに備える授業が多かったです。しかし、この授業は先生と学生がとても近い距離で同じ目線で話し合いをすることで様々なことを学ぶことができました。普段の授業はもちろんなのですが、この授業は特に自分の知識を増やすことができたと思います。このような経験をさせていただき様々なことを考え、感じることができました。

1つは自分の知識がとても少ないと感じ、もっと増やしたいと思いました。もちろん授業を受けて他の人や先生の話を知っているだけでとても勉強になりますが、もっと自分も興味を持った分野の知識を広げて他の人たちと意見を交換したいと思いました。自分はこの授業の中で国技についてプレゼンテーションをさせていただきました。その際に世界の国技について調べ、まとめて発表して他からの意見を聞いてみたり、話し合ったりしてみると、スポーツの国際化について気になる部分がありました。オリンピックや世界選手権といった異なった国の相手と戦う試合や大会、コンテストの場合は国内でのそれよりも配慮すべき点がいくつかあります。もちろんそれは競技によって異なる部分があると思いますが、ルールや審判の面などいくつもあると思うので、それぞれの競技ごとのような規定やルールがあるのかさらに調べてみたいと思います。

さらにこの授業を通して、自分で考えながら話すことを自然とするようになりました。授業中に先生方やクラスの仲間と会話をするによって、頭の中の自分の考えとリンクさせて発言することが自然と求められていました。そのようなことを毎週することは、自分で考えて発言するトレーニングになり、将来の為になったと思います。このようなことは普段の授業ではなかなかできないことだと思います。

授業を受けている中で今まで自分が興味を持ったことのない分野、考えたことのない分野について話がありました。宗教についての話や国歌についての話は特に自分の中で初めて考える分野でした。世界にあるさまざまな宗教について考えるだけでなく、普段自分たちのそばにある仏教や神道についても学び興味を持つことができました。何気なく行っていた墓参りや初詣はちゃんとした歴史や意味を持っていることが分かり、自分たちの生活の中にも宗教が根付いていることが実感できました。国歌については、国ごとに国歌の使用の仕方、存在意義が違いとても面白かったです。またタイプ別に分けて考えてみるとまた違う視点で国歌を考えることができ、その国の歴史的背景や文化、宗教がみえてきました。

授業の中で様々なことを国際関係と結びつけて考え、話し合ってきました。自分はそうしているうちに国際関係というものは、本当はもっと自分たちの身近なものではないかと思うようになりました。大学に入ってから今まで国際関係学部とは何を学ぶところなのか今ひとつわからないところがありましたが、この授業を通して何を学ぶところなのかははっきりしてきたと思います。

自分はこの授業を通して自分の興味のある分野を探して見つけることができ、考えて発言する力に身をつけるトレーニングをするとともに国際関係という物を身近に感じるようになりました。そして今まで興味なかった分野に視野を広げることができたと思います。この経験をこれからの大学生活や卒業後の将来に活かしていきたいです。

ハイブリッドプロジェクトについて

学生 E

僕は、このハイブリッドプロジェクトに関しては高校三年生の時から知っていたのでどのような講義なのか楽しみにしていましたが、僕が思っていたよりも面白く、自分の知りたいことや伝えたい事を出来て良かったです。そして、僕が発表した宗教鵜の事に関して、国際と関係がなかったため、国際という視点から議論できるようにしたいです。

このハイブリッドプロジェクトで、印象に残った議論は、音楽についてとスポーツに関してです。僕が、興味のあることだったので、議論できて良かったです。今後は、アメリカで起きたテロについて調べてみたいです。

ハイブリッドプロジェクトレポート

学生F

私は、国際的な問題を学生と教員が、ディスカッション形式で授業するという点について興味を持ち、このハイブリッドプロジェクトを履修した。

授業の始まったばかりの頃は、提示された議題について全く知識がなく、自分で何が分からなくて、何を質問すればよいか分からなかった。しかし、授業を重ねるごとに学生のみんなが積極的に質問をする姿や、それぞれ多様な分野を研究している教員がどんなに細かな質問でも視点を変えて、答えてくださるので、私も気軽に質問や意見を少しずつ言えるようになった。

中山先生が提案なさってから始まった、ハイブリッドプロジェクトアンケートは、特に勉強になった。時間内に議論しきれなかった問題や意見を、もう一度考え直す。また、前回の感想から発展させ新たな問題を議論できる。一週間はさむことで、知識を増やして振り返ることができる点がとてもためになった。自宅でも先生のあらゆる視点からの見解や、生徒の率直な疑問を見て多くに知識を得ることができた。

私は、村山さんの選挙に関するプレゼンが一番印象に残った。今年から18歳以上に選挙権が与えられた件だ。私たちの年代からも選挙が可能になったが、未成年のどれだけの人が参加し、しっかりと考えた上での投票なのか、同じ年齢の投票者としての意見、考えの交流がとても身近にある問題で新鮮だった。他の学生の発表も、あまり気にしていなかったことを深く掘り下げた内容の濃いものだった。教員の韓国や、難民などの時事的なニュースによる議論も現状を把握し、知識を増やす元になった。

秋学期からの半年間の授業とまだ短いながらも、毎回の授業での新しい疑問から多くを学ぶことができた。この授業を通して国際的なニュースや新聞記事を、意識して見るようになった。また、問題を議論するという授業であるが、固い雰囲気ではなく学生が気軽に疑問点を発言できる点が、学びやすく意欲的に取り組めるハイブリッドプロジェクトの利点だと思う。週に一度しかないけれど、この90分がとても楽しく意味のある充実した授業に感じる事ができた。来年度も履修が可能であれば、参加してみたいと思った。

平成 29 年 1 月 17 日(火)

ハイブリッドプロジェクトを振り返って

学生 G

私は、ハイブリッドプロジェクトの授業を以下の3つの点において良かったと思います。

- ① 先生方や他の学生たちと話し合える
- ② 自分にとって新たな考え方が発見できる
- ③ アドリブで得られる思考力

まず①に関して。普段は話す機会のなかなかない先生方とも議論という形でコミュニケーションができます。受けている授業の担当の先生であっても、その担当の分野以外のことに対する考え方や意見等が拝聴できて新鮮です。そして、他の学生の社会問題等、物事に対する意見を聞けるのも魅力的です。普段、他の学生と真面目に時事ニュース等に関して話し合うことは、正直あまりありません。自分と同じ世代、同じ学生がどのように社会の物事を見つめているのか知れることは楽しいです。それに、刺激になります。

次に②について。この授業は新たな知識を得られることだけでなく、新たな考え方を発見できる場でもあると思います。先生方からだけでなく、学生からも、「なるほどそういう見方もあるか!」と思わされる意見を聞くことができます。その経験は自分の視野を広くし、いろんな物事についてより深く考えることができるようになります。それと、自分で意見を人前で言うことで、その意見の矛盾点やあやふやな部分が見えて来ることがあります。この見えてきた部分をまた調べなおすことで、自分の知識をより深めることができます。

最後に③に関して。この授業の議論は筋道を作らずに行うものなので、大まかに決められたテーマについて自由に発言できます。時には、テーマから飛躍したりもします。それもこの授業の面白い要素だと思いますが、基本的に「今何が議論されているのか」をとらえて、それに関連づけて話す必要があります。頭をフル回転させて、自分の知識や経験を引き出して、意見を組み立てなければなりません。授業を通してこれを繰り返すことで、ある物事に関連して考える力が身につくと思います。それと、「一見関係していない事柄も、この部分では関係しているのかも?」と気づく力も発達すると思います。

これらの点から、ハイブリッドプロジェクトは魅力ある授業です。特に②と③は、さまざまな学問に触れて国際に関して考える、国際関係学部の学生として必要なことだと思います。そして、この授業を通して得られた経験や知識は卒業した後も生かされていくはずだと思います。

それから何より、この授業は楽しいです。人と知識を共有すること、意見を交わすことは純粋に楽しいです。それだけでもこの授業は有意義なものだと思います。

私は、「学生同士や教授と話す機会がほしい。」「受け身の授業ではなく、授業に積極的に参加したい。」という思いでこの講義を履修しました。初めて教室に入ったとき、お互いが向き合う形の机、左右には教授、普段とは違うスタイルに緊張し戸惑ったことを覚えています。また、会話についていけるかという不安もありました。そんな心配だらけのスタートでしたが、非常に充実したものとなりました。

この講義の魅力の一つに、それぞれ専門が異なる教授が複数いるということが挙げられます。生徒から教授に向けてではなく、教授から教授への質問も飛び交います。1つのテーマから、視点のことなる様々な意見を聞くことができ、より知識を深めることができました。まだ自分の興味のある分野が見つかっていない人は、見つけるきっかけになりますし、もう見つけている人でもそれをさらに広げるチャンスになります。

また、授業中だけでなく、休み時間の雑談の中からもたくさん面白い話を聞くことができました。一人が何か話し始めると、周りを巻き込んでのちょっとした議論が起こります。様々な経験をされた先生方の体験談を聞けるのは、とても贅沢なことです。このような時間を通して、教授と学生の距離も縮めることもできました。

この講義でたくさんのことを学びましたが、一番自分の中で大きく響いたことは、『大切なのは結論ではなく、行き着くまでのプロセスである』ということです。私自身、うまく発表しよう、まとめようと先走って、よく後悔します。この講義でプレゼンをした際、私の発表に対して疑問を持ってくださったり、私の知らなかった情報を付け足してくださったりしてくれた方が大勢いらっしゃいました。いつも「もっとこうすればよかった…」と反省ばかりしていますが、この発表では反省だけでなく、自分の知識が増えた気がして、発表後とても充実感がありました。

ハイブリッドプロジェクト A を通して、知識が増えただけでなく、広い視野を持てるようになりました。世の中には様々な偏見がありますが、それも見方を変えれば自分にとってプラスなことになるかもしれません。『偏見はチャンスだ』いつか中山先生がおっしゃっていた言葉が心に残っています。この講義で学んだことを生かし、『Hybrid な人間』を目指します。

今回は少人数であったことでひとりひとりの意見を共有することができました。機会があれば、グループワークをしてみても面白いのではないのでしょうか。教授と学生を交えてディベートをしてみたいです。身近なテーマについてより深く考えることができますし、全員参加ということもあり、より活発な議論ができると思います。

ハイブリッド・プロジェクトでの経験

学生 丁

ハイブリッドの第一回目を終えたときは、先生方の話に圧倒され、これから授業についていけるか不安になりました。初めのうちは、頑張ろうと意気込んでいたものの、言葉が出てこなくて悔しい思いをしました。議論に入ろうと思っても、この内容で問題ないのだろうか、いつ言えばいいのかと考えて、発言できないことも多くありました。また、前回の授業の感想の紙を読んで、感じたことについて説明をするときなど、話すことに苦労しました。

それでも、回が進むにつれて議論することにも慣れてくるのではないかと考えていました。いまだに緊張はしますが、以前に比べてずいぶん変わったように思います。上手く言おうとしないよりも、伝えようとするのが大切だと思うようになりました。より自然に話し合いに参加できるようになった気がします。

また、この授業ではさまざまなことに挑戦出来ました。投票の自由に関するプレゼンやハイブリッド・プロジェクトについてのパネル作成、授業の司会進行にも取り組みました。皆の発表も聞いて参考になりました。今後ますます発表の場が増えていくと思うので、わかりやすくおもしろい発表になるように改善していきたいです。

しかし、もっと意識しておけばよかったと後悔していることもあります。

この授業は、人の考えが感じられる貴重な機会で、自分にはない知識や発想が多く見られます。宗教やスポーツなど、この授業がなければ知ろうとしなかったかもしれません。宗教と今の生活に強い結びつきがあることも気づけず、スポーツの不条理さにも注目しなかったと思います。多くの分野について話し合いをして、興味の幅が広がったのはハイブリッドのおかげです。

ただ、話を聞いて感心したことについて、調べて深く掘り下げていくことができなかったと思います。受信するだけで、発信ができなかったと感じます。この点は勉強の仕方に置いて、今後意識していきたいです。

また普段からいろいろな話題にアンテナを張っているからこそ話が出来るけれど、自分は狭い範囲でしか見られていなかったのではないかと思います。さらにハイブリッドで学んだように、情報は切り取る部分で考え方が変わってきます。情報の根拠や理由に着目することも意識が薄いと思いました。この点に注意して、発表していけるといいと思います。

このように、授業を通して得られたものも気づかされたこともたくさんありますが、今後生かせるようにするのは自分次第です。少人数で自由にディスカッションをし、実践的な発表を積み重ねたハイブリッドでの授業は、良い経験になりました。学ぶ意識と興味の追求を持って、これからもさまざまな分野を学んでいきたいです。

<ハイブリッド・プロジェクトAをヒントにした研究テーマ>

ニューオリンズ・ジャズからシカゴ・ジャズへー音楽文化と社会変容の歴史スペクトラムー

教員K-1

私はアメリカ現代史を専攻し、主に大衆文化の花開いた 1920 年代、大恐慌に見舞われた 1930 年代などを中心に、文化や芸術などを含む社会史的な歴史研究と取り組んできた。その直接的な契機は、ニューディール政策の芸術プロジェクトを調べ始めたことにあった。

未曾有の大恐慌下で実施された公共芸術事業計画(Public Works of Art Project)や連邦芸術計画(Federal Art Project)は、コミュニティと芸術との関わりを深める効果をもたらし、これらのプロジェクトに参加した芸術家たちは、戦後のアメリカ文化に大きな足跡を残すことになる。このような研究をひとことで言えば、「文化」は「社会」を映す鏡なのであり、「社会」の変容が「文化」の諸相に表れると考えることができる。また、最近では「文化力」などという言葉も使われ始めているように、「文化」が「社会」の諸問題、とくに政治や経済に影響を与えることも忘れてはならないのであり、「文化」と「社会」には相互作用のモーメントが働いていると捉えることができるのである。ジャズを研究テーマにしてみたいと思うのも、このような視点の延長線上にある。

世界恐慌に席卷された 1930 年代は、ヨーロッパの「ファシズム体制」、アメリカの「ニューディール体制」という対照的な社会システムが生まれたが、恐慌の発火点であるアメリカでは、失業者救済の公共政策として芸術・文化プロジェクトを実施することができたのであり、ファシズムとニューディールでは「政治文化」がまったく異なることは確かである。

私が重視する「文化」の役割は、ハーヴァード大学のジョセフ・ナイ(Joseph Nye)教授が提唱する「ソフトパワー」にも結びつくコンセプトである。ナイ教授は、「力」を「ハードパワー」と「ソフトパワー」の 2 つに分け、「ハードパワー」(軍事力や経済力)が他者を強制や誘導で自らが望む行動をとらせるのに対して、「ソフトパワー」の源泉である魅力的な制度や価値観、そして「文化」には、自らが望む行動を自然に他者も望むようにさせる効果的な「力」があると考えた。(私は、ハーヴァードに滞在中に、何回かナイ教授と話す機会に恵まれた。)

すでに私は、1930 年代のアメリカを対象に『ニューディール体制論』(平成 17 年)を刊行したが、アメリカのジャズ文化の変遷を取り上げ、大衆文化の花開いた 1920 年代を中心に社会変容のスペクトラムに挑戦してみたい。それは、1920 年代のアメリカが華々しい大衆文化の開花した時期であり、メディア、娯楽雑誌、映画、音楽などを取り上げて「文化」と「社会」の相互作用を検証するのに恰好の時代であるためである。しかも、このような社会史研究は移民国家であるアメリカの姿を浮き彫りにするため、現代の「多文化主義」論争や「文化戦争」論争にも貢献するものであり、より広い視野で今日の国家と民族の対立、さらにはグローバリゼーションの歪みやひずみなどを克服する研究にもつながると考えられるのである。

① 好奇心旺盛な自分に!…自分で面白くするワザの修得

- *何でも面白い気持ち、こだわりをもつ、オタクが有効
- *情報を大切にすべき:お笑いブーム…アメトーク、ほんまでっかTV→音楽、宗教、政治、経済などがグローバル化
- *身近な問題にこだわり、新聞記事(いつもテレビ欄が最初、漫画もOK)
- ・さんまは、落語家に入門→どうして、落語家にならなかったのか?

② 殻を破る自分に!…大学は変身のチャンス

- *自由な大学生活から、過去にこだわらないで、新しい自分を見つける
- *苦手意識を捨て、いろいろなことにチャレンジ
- *変身できる手ごたえ→自分に自信→大学生活に手ごたえ、大人っぽさ

③ 追求し、解決する自分に!…モチベーションが大切

- *なんでかな?ちょっと調べてみよう→そうか、分かった!→面白いを実感(この手ごたえが大切)
- *先生への質問、図書館での調べも有効→自分で追求した答えが最も有意義
- *自分自身の興味や関心を誰かと話し、ディスカッションの実践→もっと面白くなるかも?もっと興味が広がるかも?

④ 生活を創造する自分に!…自分でスケジュールをたてる(ポートフォリオ)

- *大学のイベントに参加! 国際のHPのチェック!→自分のプレゼン
- *就職講座、講演会などをチェック→自分でスケジュール
- *時間に流されたり、暇すぎたりする生活を克服



⑤ ハイブリッド・プロジェクトAから次のハイブリッド、国際演習へステップ

- *学生の興味と、教員のテーマとを出し合う
- *学生の選択と、先生のグループ化
- *少しずつ、より専門的な議論へ

ハイブリッド・プロジェクト A 課題

「最初のセメスターを終えるにあたって」

2017年1月19日

国際学科

教員M

1. はじめに

「国際」をいかに学ぶか、教えるか。これほど幅広く、奥深い学問もそうはない。一人の教員から多数の学生への講義による知識伝授では、教員の国際経験がいかに豊富であろうとも、カバーできる範囲は限定的であり、既存のディシプリン(学問分野)を超えることは難しい。また、教員が90分間、一方的に話す授業形式は、受講者にとっては、退屈を超えて苦痛になることもある。これらは、現行の教育方式では、越えがたい壁である。

こうした「壁」を壊し、他(大学)では体験しえない「国際」の学び・教育を実践するため、中山紀子先生のイニシアチブの下、学科全教員が検討を重ねてできあがった(但し未完である)授業形式が、「多数教員同時演習方式」と呼びうるものである。その過程で、国際を学ぶ・教える「楽しさ」を提供したい(教員も味わいたい)という思いから、型にはめず・はまらず「破天荒」な授業をしようという方針(「中山メソッド」)も、定まっていた。

日本初の試みであろうハイブリッド・プロジェクト(以下、HP)は、こうして始まった。以下は、その最初のセメスターを終えるにあたっての、一教員としての感想である。

2. 一教員としての感想

(1) 楽しい、と思える授業

正直に言えば、私-法学部出身の頭の硬い研究者で、既存の学問体系・制度枠組を好み、難解な理論、厳格な定義などを体系的に、(ほぼ一方通行の)講義を通じて学んできた-には、当初「中山メソッド」に大きな不安を覚えたものである。しかし、授業を振り返ってみれば、誇張ではなく、今まで経験した中で、最も楽しい授業の一つであったように思う。

なぜ楽しかったのだろうか。第1に思い浮かぶのは、この授業に出れば「専門外の情報・考え方が得られる」ことである。本来、教員は授業をし、情報を提供するのが宿命である。常に「知っていることを伝える」役割を担う。しかし、HPでは、興味関心・学問分野・年齢も何もかも異なる先生、学生から、多くの情報・考え方を得ることができた。

いわば、教員であると同時に、受講者である。これは極めて新鮮であった。授業中に得た情報は、すぐに別の授業や日常生活で応用することもあった(例：キリマ・ンジャロ)。国際関係・国際文化・中国語の学科の垣根を取り払い、様々な関心を持つ学生が集まる新生「国際学科」で授業を行うことになった教員には、特に有意義な時間と感じた。

第2に、展開が読めないことである。自分一人で行う授業では、事前にテーマを決め、背景資料を参照させながら、段階を追って論理的な説明を行う。そこに意外性は不要であり、不適當でさえある。しかし、HPでは真逆であり、テーマは学生の興味関心に一定の配慮をするが、授業中にどんどん変化していった。脱線する授業は面白い、と昔から言われるが、HPは初めから線路が敷かれていなかった。HPの授業中、「即興性」の面白さ、という意見が出たが、言い得て妙である。既存の授業を、譜面に忠実な「交響楽」に例えるとすれば、HPは、セッション毎に譜面の解釈が変化する「ジャズ」と言えるだろう。

第3に、結論を出さないことである。そもそも「国際」とは人間関係、国家関係の「多様性」を学ぶものであり、唯一の答えなどはなく、あったとしてもそれは通過点にすぎないと思われる。多様な意見、多様なものの見方、それが存在することを確認できたという意味で、この学問の幅広さ、奥深さを認識することができたと感じる。

第4に、学生の強い意欲を、あらためて感じることができた。様々な分野を専攻する先生が一堂に集まるという日本初の授業を果敢にも受講した学生達が、自ら調べ、それをもとに皆で議論しようとした設定したテーマは、どれも興味深いものであったし、根本的な問いかけを持っていたのに驚かされた。すなわち、学生が設定した様々なテーマは、いずれも「国際」を論じながら、日本(人)とは何か、を問うものであったと受け止めている。学生自身が感じる(感じてきた)「国際」を他者に問うことで、新たな気づきも多くあったのではないかと思われる。

(2) 改善を要する点

HPの授業は、まだ始まったばかりであり、改良すべき、または改良できるところが色々あると思われる。網羅的ではないが、いくつか気づいたことをメモしておきたい。

第1に、「議論の浅さ」が気になった。多くの参加者が簡潔に発言することが求められるため、掘り下げた議論に進みにくい。受講生が1年生であると考えれば致し方ないとも思うが、「本当にそうだろうか」と掘り下げたくなる気持ちが、やや不満として残った。

第2に、もっと多くの準備を重ねた末の議論ができなかったか。事前準備を受講者に多く課せば、教員にも学生にも負担となり、参加を躊躇することもあるかもしれない。しかし、事前にテーマを決めて徹底的に準備した上で議論を行えば、より充実した議論になったのではないか。発言者の提示する事実関係の不明確さ・不正確さも、課題と思われる。

第3に、そうしたある程度の準備作業を経た上での議論を通じて、一定の結論を形成することができれば(できなくても)、より達成感を得ることができたかもしれない。

以上は、実は、(1)で挙げた「楽しかった」と思える点(第1～第3)の裏返しである。批判的に言えば、「深い議論」・「精確な議論」を犠牲にして「楽しさ」を得たとも言えよう。もっとも、深い・精確な議論をすることだけが「国際」の学びにおいて最良かつ唯一であると考えたわけではない。ただ、両者の均衡をいかにはかるかは、検討を要すると考える。単なる「座談会」に陥らないよう、議論の精度、深度を上げる不断の工夫が必要であろう。

4. むすびにかえて

新学科設立にあたり、大学として「テーラーメイド教育」を掲げたが、必ずしもその中身については提示できているわけではない。それに対してHPは、国際学科としてこれに一つの回答を示すことがきたといえるのではないだろうか。

今後、より学生の視野を広げ、理解を深め、国際の楽しさ、奥深さを体感できるような工夫を続ける必要があるだろう。「中山メソッド」に沿い、教員と学生が創意工夫を持ち寄り、教室を飛び出し、学外、あわよくば海外で実施するようなことができれば、日本を代表する授業になるのではないか。そのような可能性を感じたセメスターであった。

最後に、担当外にも拘わらず皆勤で支えて下さった中山先生に、心より敬意を表します。

つい先日始まったばかりのような気がするのに、もう明日が今学期最後のハイブリッド・プロジェクト (A) である。新しく生まれ変わった国際関係学部の国際学科における、いわば目玉として始められたハイブリッド・プロジェクトであるが、予想を超えた面白さがあった。

他の教員も書くだろうが、何より教員である私自身にとって面白かった。そうなるだろうという気はしていたが、これほどとは思わなかった。私は以前から、「国際関係学部の面白さは、国境の壁、学問の壁を越え、そして自分の壁を越えていくことにある」、なんて言ってきたが、まさにそういう要素というか契機が組みこまれているのが、ハイブリッド・プロジェクトなのであった。うれしい驚きである。

同僚といえども、ふだんは教授会などの会議で顔をあわせるばかりで、折々の研究会くらいしか、学問的な営為にふれる機会がない。せっかく大学にいながら、もったいない話である。それが、このハイブリッド・プロジェクトでは、いわゆる専門部分野を異とする人たちが集って、学生にも分かるような柔らかい言葉で、それぞれの分野で培われた知見をぶつけ合う。

ぶつけ合う、という表現を用いたが、たしかに時には知的な緊張感をはらむときもある。しかし、それも一つのバネとして、もっと大きなスケールで響き合うものがある。ただし、それは予定調和的ではない。学生の一人が、「即興」という言葉でハイブリッド・プロジェクトを語っていたが、言いえて妙である。

ところで、教員が面白ければいいのか、というと、けっしてそんなことはないのだが、教員が面白いと学生も面白いはずだ、という仮説めいたものが、このハイブリッド・プロジェクトをつくる発想の根底にあったような気配がある。

事実、国際学科1期生にしてハイブリッド・プロジェクト1期生の学生諸氏は、実に楽しそうであった。何度か(何度も)そういう感想を聞かせてもらったので、こちらの勝手な思い込みという訳ではないだろう。

また、ハイブリッド・プロジェクトを通じて、学生達がぐんぐん成長してくのを目の当たりにできたことも、大きな喜びであった。幹が伸びて葉も茂ったのだけれど、それ以上に、見えないところで深く根を張っている、というイメージである。自分でもすぐには分からない、どこか深いところでの成長、とでもいうものがあつたのではないだろうか。



ちなみに私自身は、自由について簡単な報告をさせてもらった。その素材として2つの資料を配付した。一つは、スピノザの国家論を援用した短い拙稿である。もう一つは、「自由」という言葉のラテン語・ギリシャ語系(→liberty)およびゲルマン語系(→freedom)の語源に関する、言語学者のバンヴェニストの見解をまとめたメモである。

このとき、時間があまりなかったこともあるが、なんとなく、とくに同僚諸氏から、「それでどうなの?」、という無言の問いかけがなされたような気がした。「欧米の著名な思想家・研究者のことを持ち出すのはいいけど、それで?」、という問いを突きつけられているように感じたのである。

これもまた、ハイブリッド・プロジェクトのよさだ、と私は思った。国際関係学部のよさ、と言ってもいいだろう。もともと中部大学の国際関係学部は、政治学・法学・経済学・社会学・人類学といった学問分野を主な柱で、創設以来、そのバランスがとれていることが、この学部のよい伝統である。それに加えて、フィールドを重視する、地域研究者としての顔をもった多彩な人たちが活躍してきたことも、国際関係学部のよき伝統となっている。こうした環境では、血の通わない、生気の無い理論を振りまわすことは歓迎されない。少なくとも私は、そのように感じているし、それはとてもよいことだと思っている。

このハイブリッド・プロジェクトと並行して、貨幣理論に関する論文を書いているのだが、経済学の「理論」というものがもつ荒々しい性格、あるいは残酷さとも言いたくなるのだが、そうしたものにあらためて気がつかされて、今さらながら衝撃を受けているし、痛みのようなものを抱えている。

理論が「エライ」とされる分野では、スパッと一刀両断にできる、あるいはハンマーのような粉砕力をもつ理屈を立てた者が有利になりがちである。もちろん、理系だけでなく、文系においてもデータ収集とその分析は決定的に大事である。しかしながら、巨大な社会/世界に関するデータ収集・分析は、どうしても恣意的になりがちで、不確かなものにならないをえない。にもかかわらず理論は、不釣り合いに切れ味鋭く、そして大がかりに作り上げられる。

話がかなり横にそれたようだが、とにかくハイブリッド・プロジェクトにおいて、同僚とのやりとりの中で、ハッとさせられることが少なくなかった、と言いたいのである。有名な理論や概念もいけれども、それによって生身の人間をどこまでとらえているのか、地に足のついた議論がどこまでできているのか、ということの方が大事ではないか。そうしたことを意識させられたのである。



日本を含むアジアなどの非欧米世界において、欧米で育まれた思想や知見は、どのくらい根を張り、浸透しているのだろう。あるいは、していないのだろう。世界で政治的・経済的な地殻変動にも似た巨大な変化が起ころうとしている中で、それはますます重い問いとなっていこう。

欧米の思想を持ちだせば格好がつく、というような風潮は終わりにさしかかっているのかもしれない。しかし私は、だからこそ、自分が深い感動を覚え、心をふるわせてきた思想や学説を、できるだけ多くの人とともに語りたい、と思うのである。それが欧米のものであれ、アジアのものであれ。

最後に、もともとアジアに「自由」という思想はあったのか、ということについて、東洋史の碩学である宮崎市定が述べている見解を紹介したい。宮崎市定は司馬遷の『史記』

について語る中で、『論語』に見られる自由の思想について論じている。少し長くなるが、引用しよう（宮崎市定 [1996] 『史記を語る』 岩波文庫、152-155 頁）。

中国古代の自由人

中国においては古代封建制の基盤には都市国家があった。この都市における自由市民の生態を無視しては、中国古代史は理解できない。・・・都市には自由市民の生活があった。都市の市民はいずれの世界においても、自由を信条として生きるものなのである。中国古代とても例外ではなかったが、ただ中国には特に自由を意味する言葉が見当たらない。

孔子が言う所の仁は、時にこれを自由と訳して最もよく通ずる場合がある。『論語』に、

仁を為すは己に由る。人に由らんや。

とあるのは、他人の影響、誘惑、脅迫を離れて全く自由になりえた人が、自ら進んでやる行為が自然に仁となることを言ったと解してよい。善を為すと言わずに、仁を為すとあるのに注意すべきである。

・・・

司馬遷の手許に集まった数多くの前代の名士の中で、彼はいかなる人物を最も尊敬したかと言えば、それは完全なる自由人であったと思われる。どんな権威にも屈せず、どんな誘惑にも負けず、自己の信念に従って行動した人、それこそ本当の自由人ではないか。正に孔子の言う仁人なのである。

欧米だけでなく、アジアの古来の思想の中にも自由（に該当するもの）を探ることができる。この宮崎の見方は、ずいぶん重い意味をもつと思われる。できればハイブリッド・プロジェクトの中で、この文章を紹介したかったのだが、時間がなかったので、この場を借りて話題提供しておきたい。

しかしやはり、「エライ人」の言葉をふりかざすだけか、という問いが突きつけられそうな気もする。私の中の私がそう言っている。そして、今のアジアは、そして日本はどうか、という一層切実な問いが待っている。

ハイブリッド・プロジェクトは、私にとって、問いを見つける場であり、問いを共有するための場であるようだ。そして、それは一方通行ではありえない。学生と同僚から寄せられた問いを、私なりに受け止めていくための場でもあるのだろう。

「ぬえ」方式・リベラル疲れ・「ハヤ(下野)ソング」

教員0

1.はじめに

今回のハイブリッドプロジェクトでは、「コクサイ」にかかわるさまざまな話題について議論をしてきた。今回の授業はとて1年生とは思えない受講生と、人文科学と社会科学をこえた専門分野と専門地域を持つ教員の皆さんと議論でき、とても幸せな環境であった。ここで、自分もっていた知見に、他の参加者の知見や視点が「ハイブリッド」的に加わって得られた「気づき」や、気になる論点について、簡単にまとめておきたい。

2.「ぬえ」方式

これは、加々美先生が専門の国際法と領土・領海の問題についてコメントした際に、「条約に明記しないという意味」だとか「コメントしないという不同意」など、曖昧な解決方法に魅力を感じ、私が勝手に「ぬえ」方式と呼んだ点である。ちなみに「鶴(ぬえ)」は、サル顔、タヌキの胴体、トラの手足、ヘビの尾を持った妖怪であり、何だかわからないはっきりしないものたとえに用いられる。

このような曖昧なやり方が、自由と自由がぶつかったときに物事を解決する切り札(村山さんコメント)になるのではと感じた。物事をはっきりさせるのは、さらなる軋轢を生む原因になる可能性もある。

自分の目の届く範囲で見ると、最近の日韓合意に関する問題などはこのような解決が求められているようにも思うし、一部の政治家のように何でもかんでもすべてはつきり言うことは「気持ちいい」が、それですべてが解決するわけではない。

ただし、曖昧な解決をした結果、公開されない密談での解決が増えてしまったり、大事な問題があまりにグダグダな結論になってしまったりするのは問題かもしれない。

3.世界規模のリベラル疲れ?

授業中に高先生が言ったように、2016-2017年は我々の住む世界の大きな転換点だったかもしれない。イギリス

のEU離脱やトランプ新大統領の誕生など、これまで押さえてきた箱のふたが開いてしまったような変化があった。ただ個人的には「何かがおかしい」と思いつつ、見守っていたようなところがあった。授業中に、やはり高先生が「リベラルを続けると疲れが出るのでは」とのコメントがあり、われわれは世界的に疲れているのではないかとも思えた。新たな、負担のないリベラルはないだろうか。

3.韓国の大統領弾劾と「ハヤ(下野)ソング」

大きな変化は、自分が長くお付き合いをさせてもらっている韓国でもあった。朴槿恵大統領が親友への機密漏洩、利益供与の疑惑から批判され、退陣を要求する全国的規模のデモが毎週続き、弾劾に至るとい、前代未聞の状況となった。これをこの授業で話そうと思い、「ハヤ(下野)ソング」を訳しつつ、韓国の「上手なデモ」の話をしたところ、ちょうど韓国に出張をしていた和崎先生の英文紙のデモ記事紹介から、これは「demonstration」ではなく「candlelit rally」であることを知った。

授業でこの事件を紹介し、いろいろな質問を受け、朴槿恵大統領と「親友」崔順実氏の関係が、それぞれの父親である、朴正熙大統領と崔テミンの時代からのつながりがあったことが理解されるなど、かなり自分の勉強になった。また何より韓国のことがこれほど報道されたのは、久しぶりであったと思う。

4.おわりに:ハイブリッドプロジェクトの今後

今回、ハイブリッドプロジェクトAでは、受講生のおかげで「毎回出たとこ勝負の議論」という、非常に贅沢かつ、教員も面白がれる内容を持った授業になったと思う。

ただ今後、次回を受講生の状況やニーズにも対応する必要があり、今回の融通無碍さ(教員の暴走含む)のみを残し、新たなスタイルをとってもよいように思う。このあたり、今回の受講生の評価と意見も聞いてみたい。

2016年度ハイブリッドプロジェクトAを通して考えたこと

教員P

18012017

1 各回の主な内容（漏れがあったらご容赦を）

- 第1回 9/21 自己紹介
- 第2回 9/28 国歌（伊藤正晃先生）
- 第3回 10/5 国歌 pt2（河内先生や中山による資料配布あり）
- 第4回 10/12 自由の衝突（柿沼さん） キリマンジャロ
- 第5回 10/19 選挙に行かない理由（村山さん）
- 第6回 10/26 自由の語源（高先生）
- 第7回 11/9 左利きのための自由（松原さん）
- 第8回 11/16 新聞記事「難民＝犯罪者？」（和崎先生）
- 第9回 11/23 アメリカ walmart（酒井田くん）
- 第10回 11/30 日本の宗教（仏教）（近藤剛史くん）
- 第11回 12/7 韓国大統領弾劾下野ソング（渋谷先生）、英文記事（和崎先生）
- 第12回 12/14 国技・オリンピック（見城くん）
- 第13回 12/21 音楽史からみる世界と日本（桑原さん）
- 第14回 1/11 チャイナドレス（杉浦さん）、世界のお正月（近藤智也くん）、
除「夕」の鐘（今江さん）
- 第15回 1/18 総括

2 私の名言からいくつか

第1回 自己紹介の際に、学生（村山さん）の砂漠化を防ぎたいという希望に対して、「砂漠の緑化運動がかならずしも現地の人のためになっていない、逆に砂漠化が進んだりすることもある」とコメントし、その後何人かの先生による議論になった。また、自己紹介で興味あることのひとつに何気なく「笑い」をあげたところ、和崎先生がアンケートで「逸脱や「笑い（ズレているから）」は構造の真になっていく運動性を持つ」と書いて、単なる趣味を学問的に広げて解釈してくれた。

第4回 「知り合いのトルコ人から」僕はアメリカに行って初めてシーア派と

という言葉を知った”と聞いた。実は一神教の人たちが宗教ガチガチとは限らない」に対し、和崎先生が「民族精神はもちろんだが宗教でさえハズレ（もっと言えば異端）、ユルさ、混成があってもよい」とアンケートで続けてくれた。

第5回「ハロウィンを取り入れるのも日本の文化」「ハイカルチャーだけが文化ではなく生活に密着したのも文化」「伊藤先生の声が聞きたかったなあ」

第6回「市場があれば国家はいらない」という作家藤原新也の言葉を紹介したところ、高先生から反撃。しかし、和崎先生がアフリカのある市場の状況を踏まえながらうまく説明してくれた。

第8回 「フランスの新聞にこそ容疑者の国籍を載せて欲しい。爆破事件を起こしているのはムスリムであってもフランス国籍の人がほとんどということが忘れられている」

第11回 「アメリカのレーガン夫人ナンシーも、ミャンマー政権も占いに凝っていた。今回の韓国の場合はお金がからんでいるが、権力者が占いに頼りたくのは実はよくあることではないか」

第12回 「日本の大相撲がかつて八百長が問題となって休場したことがあったが、もともと大相撲は神前での奉納試合という意味合いが強かった。それを西洋風のフェアプレイ精神を押し付けるのはどうか」に対し、和崎先生が「琵琶湖では綱引きで田んぼの水引を決めていた。勝敗は毎年順番と決まっている。超越的な存在に決定を委ねて折り合いをつける」と補強してくれた。伊藤先生から「中国語で綱引きのことを拔河という意味がようやくわかった」との発言に漢字だけではない文化のつながりを感じた。

3 まとめ

2の「私の名言」をまとめてみて、あらためて、私はこの授業を本当に楽しんでいたということを理解した。我ながらたくさんの名言を生み出したと自慢したいところであるが、実は私だけの力ではなく、参加者みなさんのおかげである。みなさんの発表、質問、コメント、反論までもが私の名言を生み出す力となってくれた。講義やゼミで決してうまくいっているとはいえない私でも、この授業では自由に楽しく発言できた気がする。

とりわけ、和崎先生には感謝したい。和崎先生によって、私の発言の多くが補強され、拡大されている。和崎先生と私は同じく文化人類学を専攻している。先生は多くの場合、学問の理論を大上段に振りかざすのではなく、むしろ

ろ、自分がフィールドで知り合ったアフリカの人々などの語りから立ち上げて、いつのまにか普遍的な知に私たちを連れて行ってくれている。私もまた、人々の語りから始めるのだが、高みに連れていくほどではない。物事を斜めからみようとする文化人類学的な発想はあって、それを伝えたいのだが概ね舌足らずである。しかし、ここには和崎先生がいる。みんながいる。私だけで全てを完結する必要はない。ぽっと何かを差し出せば、答えてくれる人たちがいる。この安心感は何物にも替え難い。「あたたかな知の共同体」とも言えるこの空間では、何をテーマにするか、誰が発表するかはさほど問題ではない。そこにいることがまず肝心なのだ。

それでも、文化人類学という学問がこのような空間に重要だということは言っておきたい。文化人類学は、つねに中心に対しては周縁、マジョリティに対してはマイノリティの立場にたつようにしている。そもそも学問は、既存の価値観の相対化、すなわち、何でもうのみにするな、当たり前を疑え、が大前提である。その点、文化人類学は筋金入りである。当たり前、常識とは文化によってそれぞれに異なり、それに優劣はないとするのだ。欧米もまた一様ではないだろうが、先進国とされる地域より、えてしてそうと呼ばれない地域にこそ豊かな何かがあることも多い。私がハイブリッドプロジェクトの場で、独自の意見を言えているとすれば、それは私が鋭くて優秀な研究者であるからではない。ここで話し合われていることを、もし私がフィールドワークをしたトルコの村の人が聞いたらどう思うかな、イスラーム教徒の人はどう行動するかなという想像をすることができるからである。異なる世界からの異なる意見をいくつも重ねて考えることができる、これに勝る豊かさはないのではないか。それを認めることはまさに異なる学問分野、異なる世代、異なるジェンダーから集まって話しあう、私たちのハイブリッドプロジェクトにふさわしい態度である。私がこのハイブリッドプロジェクトをひそかに「人類学化プロジェクト」と呼んでいることはあながち間違いではないだろう。「読み書きそろばん人類学」

(湖中真哉 2015「編集後記」『文化人類学』80/3:512)を強くお勧めする。これが私が2016年度ハイブリッド・プロジェクトAを通して考え付いたことである。

講義「ハイブリッド・プロジェクト」を通して

教員 Q

ハイブリッド・プロジェクトの一員に選ばれたとき、演習系の講義を担当するのが初めてだったということもあり、授業が構成できるかという不安しかなかった。第二外国語の習得、とくに中国語を指導するにあたり、統語論、語彙論、音声学、音韻論といった言語学の分野に特化して研究してきたため、文化や社会に関する事象に対しては造詣がなく、無頓着と言っても過言ではなかった。言語を形成する上での文化的、社会的背景は把握しているつもりではあったが、それだけでは「ハイブリッド」に長けた教授陣と渡り歩いていける自信にはならなかった。

そもそも「ハイブリッド」とは何かを考えるに至った。

From Latin *ibrida* under influence of Ancient Greek *ὕβρις* (*hubris*, “outrage”). Cognate to Latin (glosses) *iber* and *imbrum* (“mule”).^①

hybrid: 1) an animal or plant that has parents of different SPECIES or varieties

2) something that is the product of mixing two or more different things^②

日本語では交配種、雑種、混血、混声物といった類の訳がされており、語源は古代ギリシア語の「暴力」を意味するものからきている。おそらく、*ὕβρις* という語が作られた時代では、混血や雑種といったものは非正統のものとして異端視されていたと推測できる。しかし現代では、イネなどの品種改良もそうであるが、内燃機関と電動機の前動力をもつハイブリッドカーが登場したり、イヌなどの雑種を「ミックス」と呼んだり、それぞれのいいところを掛け合わせ(組み合わせ)ることで、純血であるサラブレッド(*thoroughbred*)^③以上の性能を持ち合わせるものを作り上げており、語彙が誕生した時代とは「ハイブリッド」の使われ方が変わってきていることがわかる。本講義でもハイブリッドな議論をし、ハイブリッドな学生を誕生させることを目標に取り組んだ。ただし、本来の意味である「暴力」的な押し付けで学生に取り組ませるのではなく、学生の自主性を重んじて、そこから自然に「ハイブリッド」に向かえるよう、クラスの雰囲気づくりに配慮した。

本講義を担当する以前に、国際関係学を高校生に説明する機会があった。当時は、語学をきっかけにして国際関係学を語っていたが、国際関係学の主たる「国家間の関係性」について多くを語るができなかった。しかし、本講義を担当し、分野の異なる教授陣の話聞く機会が増え、各教授の多くの経験談や知識が身近なものとなり、人類学や政治学などの領域の知識が格段に増えたことで、国際関係学の説明に厚みを持たせることができ、また、中高生に興味を持たせる説法ができるようになった。振り返ってみると、本講義は宝箱のような存在であったと言える。一つの宝箱を探す行為は一度だとしても、宝箱には様々な宝が入っていて、このような容易に多くのものが手に入れられる機会は、他の講義や講演ではあり得ないだろう。ただ、その宝の価値を見出せるかどうかは、受け取った側がどう扱うかによって決まると考える。受講生にも、その宝を受け取っ

① “ibrido” in: Alberto Nocentini, Alessandro Parenti, “l’Etimologico — Vocabolario della lingua italiana”, Le Monnier, 2010.

② Oxford Advanced Learner’s Dictionary (OALD)

③ thorough (完璧な、徹底的な) + bred (育てられた)。ウマに用いる場合、英国産牝馬とアラブ産牝馬を掛け合わせた競走馬を言う。

て輝かせる力を身につけていってほしいと願っている。

全体を振り返り、学生の発言が活発で、きちんと考えを持って発言していることに毎回驚いていた。自分が得た情報や知識を、しっかり場に提供でき、また、他の人の意見に自分の意見を付け足したり、反論したりする場面があったことは、本講義が成功裏に終わることができたのではないかと考える。プロジェクトを完成させるという点では、形として残ってはいないが、受講生だけでなく教授陣の闘志にも火をつけたという意味においては、意義のある講義であったと考える。ハイブリッド・プロジェクトの活動を学部内に発信することを皮切りに、大学内、学外へと活動を報告できるような講義づくりを心がけていきたいと感じた。次年度以降のハイブリッド・プロジェクト B、C、D では、教授陣の顔ぶれが変わるため、新たな分野の知識が得られると予想される。今回の受講生がすべてのハイブリッド・プロジェクトを受講し、大きなプロジェクトを発信することを期待してやまない。

最後に、本講義で時間を共にした先生方にはお礼申し上げます。和崎先生のアフリカ研究は、今まで持っていた常識を根本から崩していただきました。「キリマ・ンジャロ^④」の話は目から鱗でした。中山先生のトルコを中心としたイスラム教の話は斬新で、テロとの関係性を示していただきました。澁谷先生の韓国デモの内容はホットな話題ということもあり、ずっと入ってきました。河内先生の時々出てくる昭和歌謡が微妙に自分の圏外だったこともあり、後から調べていました。オカリナのレパトリーに入れます。高先生は守備範囲が広く、参考になる文献を提示いただきました。また、アイデンティティの問題に関してはご自身の体験談などを話されたので、その問題が自分のことのように感じました。加々美先生の要所に出てくる「ボケ」に似たコメントが場を和ましていて、より活発な議論に展開できたのではないかと思います。また、即座に調べて報告いただいたことも、容易に知識が身になったように感じます。諸先生方、ありがとうございました。

受講生のみなさんからも多くの知識を受け取ることができました。それぞれに得意分野を持っていて、発言の時の顔が生き生きしていたのをおぼえています。自分の関心のある分野に興味のある学生とは、何かしらのプロジェクトを立ち上げたいと思います。ぜひ、声をかけてください。

個人のプロジェクトとして懸案になったことを、次回の講義でも発信していく予定です。

△民族と音律

△宗教とホラー

△国歌と国家の関係

△左利きはすばらしい！（脳のはたらき）

△・・・

^④ kilima(山) + njaro(白さ)という通説がある。フランス語 Mont Blanc、イタリア語 Monte Bianco に似ている。